

◇特集 北米文学における核の表象について

ニュークリアリズムと戦後 アメリカ文化

マイケル ゴーマン
Michael Gorman
(松永京子訳)

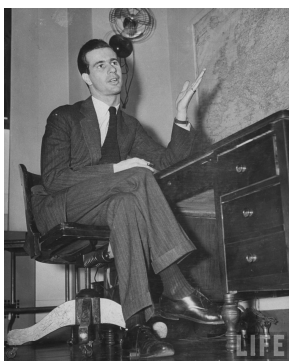
一. はじめに

一九四六年八月三十一日、広島に投下された原子爆弾の「恐ろしい意味」や「途方もない破壊力」について熟考するアメリカ人がほとんどいないと確信した『ニューヨーカー』誌の編集者たちは、本誌の全誌面を割いて、ジョン・ハーシー(John Hersey)の記事「派遣記者——ヒロシマ(A Reporter at Large: Hiroshima)」を掲載した(十五頁)。^① 同年後半、アルフレッド・A・クノッフはこの記事の副題、すなわち今日までその名で世界中に知られることとなった『ヒロシマ』を書名として本記事を出版した。『ヒロシマ』は、アメリカ合衆国における核文学の出発点である。もちろんハーシーは、広島原爆を記事にした最初の記者ではなかったが、原子兵器の破壊能力を(軍の用語ではなく)人類の用語でアメリカの読者に伝えた最初の記者となった。この影響力のあるテキスト登場後、アメリカ核文学は(一)核攻撃・アポカリプ

ス(二)核の不安(三)ニュークリアリズム(四)環境、といった観点を内包したものと拡大していく。そして一九六〇年代初めには、これらすべてのテーマがアメリカ文学やジャーナリズムにみられるようになる。それ以降の半世紀にわたってこの四つのモチーフは、核兵器や核エネルギー産業に対するアメリカ市民の視点に影響を与え、(本・エッセイからビデオ・ゲームにいたるまでの)様々なジャンルを超えた文化的産物を形成するようになった。

二. 原爆直後——『ヒロシマ』から『ヒロシマナガサキ』へ

ジョン・ミシヨール(Jon Michaud)によれば、「ヒロシマ」の記事を着想し、一九四五年、中国と日本に向かう準備をしていたハーシーに提案したのは、当時『ニューヨーカー』誌の編集長だったウィリアム・シヨーンだった。^② 一九四五年の冬、日本に着する前の三十一歳のハーシーは、戦闘の恐怖や凡庸さの目撃者として、米国の読者に報告する経験豊かな従軍記者であった。またその前年には、解放後



ジョン・ハーシー(1914-1993)

のシシリーを舞台とした小説『アダノ鐘』に自身の戦争体験を反映して描き、一九四五年五月、ピューリッツァー賞を受賞していた。言い換えれば、第二次世界大戦中の

ハーシーは、尊敬される従軍記者であり、賞賛される小説家でもあった。しかし今日、彼がおもに記憶されているのは、太平洋とヨーロッパの戦区からの特派でもなく、彼の小説でもなかった。それよりも彼が褒め称えられたのは、戦後のルポタージュの傑作『ヒロシマ』の著者としてであった。事実、一九九九年、ニューヨーク大学ジャーナリズム学部は、二〇世紀におけるもつとも重要な報道記事として『ヒロシマ』を選んでいる(ミシヨー 頁なし)。

『ヒロシマ』は、アメリカ人の原爆観と日本人に対する見方を根本的に変えた偉大な報道作品である。この作品が発表される以前、広島と広島市民に与えた被害の大きさと、この恐ろしい新科学技術の潜在的な破壊力について理解するアメリカ人はほとんどいなかった。歴史学者であるアラン・M・ウインクラー (Allan M. Winkler) の『アメリカ人の核意識——ヒロシマからスミソニアンまで』(Life Under a Cloud: American Anxiety about the Atom)によれば、ハーシーは「感情を交えることなく、しかし生々しく被害を描くことによつて読者を戦慄させた。テレビがまだ日常的備品になっていなかった時代に彼は、原爆の威力を伝えるイメージを読者に与えるとともに、将来におけるこの強力な新兵器の使用について問いかけさせたのである」(五頁)。^③ すなわちハーシーは、一九四五年八月六日に人類に放たれることとなった残忍さをも封じ込めていた、アトミック・エイジへの扉を開いたのだった。

『ヒロシマ』が与えた衝撃は、その細部への配慮に基づいている。ハーシーは広島に一ヶ月滞在し、原爆の目撃者にインタビューを行い、佐々木とし子さん、中村初代さん、藤井正和医師、佐々木輝文医師、谷本清牧師、ウイルヘルム・クラインゾルゲ牧師

の六人の被爆者の証言を詳述した。『ヒロシマ』においてハーシーは、一貫して冷静なアプローチを取った。彼の提示する内容を考慮したとき、彼の広島からの報告は、著者自身の意見が不在しているという点において注目に値するだろう。

八月九日、谷本氏はまだ泉邸で奮闘していた。夫人の泊まり先の、郊外牛田の友人宅に行き、爆撃前から預けておいたテントを取り出し、泉邸へ持ち帰って張った。歩きも運びもできない負傷者の避難小屋にしたのである。泉邸では何をしていたも、元のお隣りの鎌井の奥さん——まだ二〇の若奥さんで、炸裂当日、死んだ女の子の赤ん坊を抱いていた——が自分を見つめているような気がしてならなかった。この小さな死体は二日目から、もうひどい悪臭を放ちはじめたが、奥さんは四日間抱きつづけたのである。(七十四—七十五頁)^④

ハーシーの超然としたスタイルにもかかわらず、事態の恐ろしさは明らかである。原爆直後の死、破壊、病氣、生存を落ち着いた態度で説明してはいるものの、(原爆を問ったり、総力戦の提供者を批判したりするまでもなく)ハーシーは原子爆弾の非人道的行為を描き出すことに成功した。

一九九三年、ジョン・ハーシーはこの世を去った。けれども彼の遺産は、反核運動や歴史上初(そして今のところ唯一)の二回の核攻撃を効果的に記録しようとする願いのなかに生き続けている。ハーシーの『ヒロシマ』の伝統を引き継いで、日系アメリカ人監督であるステイヴン・オカザキ (Steven Okazaki) は『ヒロシマナガサキ』(White Light/Black Rain: The Destruction of Hiroshima and Nagasaki) (二〇〇七年)を制作した。^⑤ このドキュメンタリー

映画のなかにオカザキは、広島と長崎の十四人の被爆者へのインタヴューと四人のアメリカ人へのインタヴューを収めている。四人のアメリカ人のうち一人は、世界初の原爆が投下されたトリニティサイトにおける核実験の目撃者、そして残りの三人は、広島に「リトルボーイ」を投下したB 29爆撃機エノラ・ゲイの搭乗者であった。ハーシーとは媒体を異にしているものの、オカザキの事実に基づいたアプローチはハーシーのスタイルを模倣しており、ハーシーが六〇年以上前に記録にとどめた出来事の不变的な重要性を再確認しているといえるだろう。

三. ニュークリア・アポカリプス——『いろりの影』から『ザ・ロード』へ

一九四九年、ソ連は初の原爆投下に成功した。この核実験は、核戦争の可能性と、アメリカにおける共産主義者のスパイ捜査に火をつけた。これらの恐怖を喚起する出来事はまた、北米のサイエンス・フィクション作家たちの想像力を刺激した。第二波の「レッド・スケア（赤の恐怖）」として知られるこの時代に生まれたのが、ジュディス・メリル (Judith Merrill) のディスタピア小説『いろりの影』(一九五〇年)である。⁶⁾

メリルの小説では、核攻撃の政治的・社会的重要性に比べると、核兵器の使用に対する懸念は二次的な問題にすぎない。本小説は、五〇年代にアメリカの政治を握ったマッカーシズム (マッカーシーによる「赤狩り」) を反映し、共産主義者のスパイ狩りが重大な役割を担っている。ポール・ブライアンズ (Paul Briants) が『ニ

ュークリア・ホロコースト——小説のなかの原子戦争 一九五〇年—一九八四年 (Nuclear Holocausts: Atomic War in Fiction, 1895-1984)』のなかで認めているように、メリルは「いたるところでスパイをみつける」「戦後の」熱狂 (十七頁) を本作品に組み入れた。⁷⁾ 横行する反共産主義に加え、メリルは、水素爆弾以前の核攻撃が、爆撃地の外側に住む家族に与える影響を描いている。特に本作品は、ミッチェル家の女性メンバーの経験に焦点を当て、ニューヨーク州ウエストチェスター郡の郊外に住む母親 (グラディス) と二人の娘 (バーバラとヴァージニア) が、ニューヨーク市に核攻撃がなされた直後、どのように生き延びているのかを想像している。

午後一時十五分、ニューヨーク市が攻撃されたとき、グラディスは一人で家にいた。夫は仕事、娘たちは学校で、メイドは病気のために休んでおり、グラディスは地下で洗濯をしながら、何か奇妙なことが起っていることを、ごくほんのわずかにしか感じとっていない。

彼女が聞き取ろうとしたとき、音は消えてしまった。工場の場合にしてはあまりにも短すぎる。音色も違っていた。甲高い音ではあったけれど、もしも高窓に流れ込む明るい日差しがそのとき急に強まって、漆喰の塗られた地下の壁を赤とゴールドの光の洪水で覆うことがなければ、雷鳴と間違ってしまういそうだった。彼女は首を振って、全てを忘れてしまおうとした。けれどもなぜかその音は——実際には消えてしまったその音は——彼女の頭のなかに残りつづけた。不気味で、ぞつとするような音。そのとき、まるで彼女の気持ちの変化

を察したかのように、小さな窓は暗くなり、安心感を与えてくれていた太陽の光が消えた。もしかしたら、やっぱり雷鳴だったのかもしれない。时期的には早すぎる、いつもと違つた雷をとまなう嵐。(『いろりの影』頁なし)

グラデイスがラジオ放送で核攻撃について知つたのは、三時すぎに娘たちが学校から帰ってきた後だった。その後、女主人公たちは、略奪者、好色な民間防衛のボランティアによる不愉快な訪問、そしてヴァージニアの放射線病に遭遇する。ポール・ブライアンズが指摘しているように、『いろりの影』は「核戦争に対する女性の視点」から、「戦争の影響の、逃れようもなく個人的な性質に直面している」(四十一頁)。まさにその通りである。ジュデイス・メリルの『いろりの影』は、アトミック・エイジにおいては非戦闘員でない者はいないということを読者に教えてくれるのだ。

ジュデイス・メリルが五十六年前に『いろりの影』を出版した時と比べて、二十一世紀の核文学におけるアメリカの家族は、さらに一層差し迫つた危機に直面している。二〇〇六年、コーマック・マッカーシー (Cornac McCarthy) はピューリッツァー賞を受賞した小説『ザ・ロード (The Road)』を出版した。この小説は、メリルが一九五〇年に描いたものよりも、より恐ろしい惨事生き残ろうともがく父と息子についての物語である。

翌日の正午ごろには市街地を通り抜けた。拳銃をいつでも手にとれるよう彼はカートの一番上の折りたたんだ防水シートの上に置いていた。少年に自分のわきへびつたりくつつかせた。都市は大半が焼けていた。生命の気配がなかった。通り

の自動車は灰のケーキに包まれほかのものもすべて砂埃と灰に覆われていた。乾いた泥の表面にはタイヤ跡の化石。とある玄関口には乾いて革状になった死体が一つ。陽にしかめ面を向けている。彼は少年を引き寄せた。頭に入れたものはずつとそこに残るんだ、といった。そのことに気をつけたほうがいい。

忘れてしまうものもあるんでしょ？

ああ。人間は憶えていたいのを忘れて忘れたいのを憶えているものなんだ。(十六一十七頁)⁶⁾

アメリカが核攻撃を受けた後、郊外の母娘が直面する脅威を描いたメリルの物語に欠如していた男性を補う小説として、『ザ・ロード』を読むことが可能なのは、言うまでもないだろう。『いろりの影』のほとんどの場面において、父親のジョン・ミッチェルの不在が著しい一方で、マッカーシーの小説の母親は、記憶でしかない。謎の出来事(「長い鉄の刀のような光」「二連の底ごもりのする衝撃」(六十一頁))によって時計が一時十七分に止まると、主人公である父と息子は、家(そしていろりを)を捨てなければならなくなるのだ。もつと住みやすい環境のために南への移住を余儀なくされると、父親は息子を食べさせるために、そして息子を守るために奮闘する。『いろりの影』と『ザ・ロード』は、社会批判の作品でもある。『いろりの影』は冷戦時代のアメリカにおける赤狩りをオブラートに包んで批判するために、核のナラティブを用いた。一方で、コーマック・マッカーシーの小説は、環境的比喩として、多くの批評家に認知されている。事実、環境活動家であり『ガーディアン』紙のコラムニストでもあるジョージ・

モンビオット (George Monbiot) 著、『ザ・ロード』を「これまでに書かれた最も重要な環境の本」(二十九頁)と名付けた。⁹⁾

二〇〇九年、『ザ・ロード』は同じ題名で映画化され、一九五四年にABCテレビが「原子攻撃」という題名でテレビドラマ化した『いろいろの影』も含んだ、アメリカ映画や米テレビ番組向けに脚色された多くの核作品のリストに加わることとなった。このリストのなかでもとりわけ有名なのは、『渚にて』(一九五九年、映画、ドラマ)、映画『博士の異常な愛情または私は如何にして心配するのを止めて水爆を愛するようになったか』(一九六四年、映画、風刺)、『未知への飛行』(一九六四年、映画、ドラマ)、『ザ・デイ・アフター』(一九八三年、ABCテレビ映画)、『フェイルセーフ』(二〇〇〇年、CBSテレビドラマ)、『ジェリコ』閉ざされた街』(二〇〇六―二〇〇七年、CBSテレビドラマシリーズ)といった映画やテレビドラマであろう。『渚にて』は、オーストラリアの小説家ネビル・シュートによる一九五七年の同名小説をもとに、ユナイテッド・アーティストが制作した映画である。冷戦期、特に一九六二年一〇月のキューバ・ミサイル危機後、核戦争や核惨事を主題とした映画やテレビ番組は、驚くほど人気を得るようになった。実際のところ、一九八三年十一月二十日にABCテレビが放映した『ザ・デイ・アフター』を視聴した数は、約一億人にのぼるといわれている(ウィンクラー 二五七頁)。娯楽産業の核戦争の主題への執着は、核兵器の脅威に対する自覚が増幅していたことを反映していた。そしてその脅威の一部は、一九七〇年代の戦略兵器制限交渉といった米ソ間の核外交の取り組みによるものであった。原子テーマへの執着に加えて、一九八〇年代、

アメリカと(旧)ソビエト連邦 (USSR) の原子力発電所で大惨事が起こった。周知の通り、一九七九年、ペンシルヴァニア州ハリスバーグ近くのスリーマイル島で部分的炉心溶融を起こした原子力発電所事故と、一九八六年、ウクライナ共和国のキエフで起こったチェルノブイリ原子力発電所事故である。

四. 核の不安とポストモダン・アメリカ文化

冷戦時代、軍や民間において核テクノロジーが適用されていることが知られるようになると、核テクノロジーやそれらが引き起こす可能性のある惨事に対する懸念も深まった。ダニエル・コールド (Daniel Cordle) は『ステイト・オブ・サスペンス——核時代、ポストモダンイズム、そしてアメリカにおける小説と散文 (State of Suspense: The Nuclear Age, Postmodernism and United States Fiction and Prose)』(二〇〇八年)において、「核の不安」は冷戦期の中心的な特徴であると論じている。「それはこの時代を定義づけるサスペンス(惨事そのものよりも惨事を予期すること)だ」(二頁)。¹⁰⁾ 旧ソ連が初の原爆投下に成功した後、核戦争の可能性は現実となり、多くのアメリカ人が潜在的な絶滅のターゲットとなった。冷戦期のアメリカにおいて「核テクノロジー」の脅威は、「日常生活の経験が編み込まれた織物の一部となった」(コールド 二頁)のである。もちろん、主流の文学作品やポピュラー・カルチャーも例外ではなかった。戦後のポピュラー・カルチャーは、核による大惨事について沈思する以上に、原爆やその他の核の現実とともに生きることによって生み出されたパラノイアを反映してい

た。核のレトリックはまた、核を扱わないテクストにおいても日常的にみられるようになった。

アラン・ウインクラーの『アメリカ人の核意識』といった先行研究に引き続き、ダニエル・コードルは『ステイト・オブ・サスペンス』のなかで、核破壊を描いた文学よりもむしろ、核テクノロジーの脅威によって形作られ、影響を受けた作品を調査している。コードルは核の不安を冷戦の心理状態として扱い（三頁、四十三頁）、トマス・ピンチョン、ドン・デリーロ、レスリー・マーマン・シルコー、ポール・オースターといったポストモダン作家の作品のなかにこの主題を探索した。アラン・ナデルとエレイン・タイラー・メイによる「封じ込め文化」の研究に影響を受けたコードルは、特に核の不安が家族にもたらす影響に興味をもっている。従って『ステイト・オブ・サスペンス』の第六章のほとんどは、ティム・オブライエン (Tim O'Brien) の小説『ニュークリア・エイジ (The Nuclear Age)』(一九八五年) に費やされることとなった。コードルは『ニュークリア・エイジ』を、「冷戦の地政学と家庭環境」を結びつけた「典型的な核の不安のテクスト」とみなしたのである(二三〇頁)。オブライエンの小説の四十九歳の主人公は、元ウラニウム貿易業者であるウイリアム・カウリングである。幼少期から核攻撃の脅威に取り憑かれ、以前の仕事による罪悪感を持ち続けるカウリングは、家族のための核シェルターを作るため、裏庭に穴を掘り始める。冷戦時代の CONELRAD (電磁放射制御) 緊急テレビ放送や学校での「ダック・アンド・カバー」は、カウリングに消えない傷跡を残していた。⁽¹¹⁾ 彼はソ連の核攻撃による危険を肌身に感じている。「僕はベッドに横



「キディ・コクーン」 ウォールター・キディ核実験場によって制作された核シェルター

という衝動に駆られたのだった。

カート・ヴォネガット (Kurt Vonnegut) の小説『猫のゆりかご (Cat's Cradle)』(一九六三年) のように、特に核兵器や核戦争に言及していない作品においても、核兵器の脅威によって生み出された不安は映し出されていた。第二次世界大戦中、ヴォネガットはドイツ兵に捕らえられ、戦争捕虜としてドレスデンの捕虜収容所で過ごしている。戦争捕虜としてヴォネガットは、連合国による爆撃がドレスデンを破壊する様子を目撃したわけだが、この総力戦の効果を目の当たりにした経験は、彼の反戦の立場に大きな影響を与えた。『猫のゆりかご』は、小説上でマンハッタン・プロジェクトに参加したフリークス・ハニカー博士に焦点を置くこ

になり、枕をおなかの上にあてていた。僕は恐怖を追い払うことができなかった。僕は狂っていない。僕は幽霊なんか見なかった。向こうに、普通に視線の届く範囲のちよつと向こうに、僕の名前がついた爆弾があった」(六〇頁)。⁽¹²⁾ 一九五八年は冷戦の絶頂期で、この時、彼は初めて核シェルターをつくりたい

とで、アメリカの軍産複合体を風刺し、原爆の「父たち」を批判したブラック・コメディーである。ヴォネガットはまた、人類に核兵器を解放した責任を持つ物理学者たちの不道徳を攻撃している。以下は、トリニティサイトの実験に対するハニカー博士の反応を描いた箇所、ニユート・ハニカー（ハニカー博士の息子）の言葉である。

最初の原爆実験がアラモゴードで行われた日（中略）一人の科学者が父のほうをふりかえつて言いました、『今や科学は罪を知った』父がどういふ返事をしたかわかりますか？こう言ったのです、『罪とは何だ？』（三十四頁）⁽¹³⁾

当時の著名な物理学者とは違って、小説中のハニカー博士は、広島と長崎の教訓から何も学ばない。そして冷戦時代、彼は「アイス・ナイン」を開発する。気温にかかわらず全ての水を氷にかえることのできる物質アイス・ナインは、使用されれば、アポカリプスをもたらす可能性を持つ。すなわちアイス・ナインは、核兵器と同等のものとして描かれていた。

五、核問題と環境

カート・ヴォネガットの小説が核テクノロジーによってインスピレーションを受けてきたように、核テクノロジーが人類にもたらす脅威は、多くのノンフィクション作品にも影響を与えてきた。一九六二年、DDTなどの殺生物剤の危険性を暴露したレイチェル・カーソン（Rachel Carson）の『沈黙の春』（*Silent Spring*）は、核のホロコーストのアポカリプスのレトリックを反映しているこ

とで知られる。事実、カーソンが本書のなかで最初に言及した汚染物質は、殺虫剤ではなく、ストロンチウム九〇であった。ストロンチウム九〇は、一九五〇年代にアメリカとソ連で水爆実験をはじめてからというものの、ほぼ偏在的にみられるようになった核降下物の放射性物質である。カーソンは明らかに、後まで尾を引く殺虫剤汚染の影響を、ほぼ無限ともいえる放射能汚染物質の半減期と対比していた。

たとえば、自然の汚染。空気、大地、河川、海洋、すべておそろしい、死そのものにつながる毒によられている。そして、たいていもう二度ときれいにならない。食物、ねぐら、生活環境などの外の世界がよこれているばかりではない。禍いのもとは、すでに生物の細胞組織そのものにひそんでゆく。もはやもとへはもどせない。⁽¹⁴⁾

引用箇所は、全ての生物の相互依存を強調している。エコシステムの一部分が脅かされるとき、エコシステム全体が絶滅の危機に瀕する。それが核汚染によるものであろうと、死をもたらす化学合成物の無思慮な使用によるものであろうとも。

カーソンの環境的関心を踏襲したのが、テリー・ヘイン（Terry Heinn）ウィリアムス（Terry Tempst Williams）や『Refuge: An Unnatural History of Family and Place』（一九九一年）や『アトミック・ファームガール（*Atomic Farmgirl: Growing Up Right in the Wrong Place*）』（二〇〇〇年）は、放射能汚染が人体にもたらす危険性について具体的に述べている。放射性降下物の影響に焦点をおいたウィリアムスの『鳥と砂漠と湖と』は、カーソンの殺虫剤に対す

る懸念を思い起こさせると同時に、生命のもろさと異なる生命体の相互関係を内省するカーソンの『沈黙の春』を反復しているといえるだろう。『鳥と砂漠と湖と』の最終章「片胸の女たちの一族」は、放射性降下物の人体への影響——特に彼女の家族で乳がんの治療を受けた九人の女性への影響——に思いを馳せる。ウィリアムスはユタ出身の彼女らを「ダウンウィンダーズ (downwinders)」、すなわち冷戦時代にネバダで行われた核実験による放射性降下物の犠牲となった人々であると見なす。⁽¹⁵⁾

西部の砂漠地帯ではそれは有名な話だ。(中略) ネバダにおける地上核実験は一九五一年一月二十七日から一九六二年七月十一日まで行われた。北に向かって吹く風が「低居住人口区域」を死の灰で覆い、風の通り道にいたヒツジたちを殺した。時代の空気も合っていた。(中略) 核実験に反対の立場をとれば共産主義体制に賛同するものと見なされたのだ。(三四二頁)⁽¹⁶⁾

この引用のなかでウィリアムスは、核兵器の生物学的影響の考察の範疇を超え、ジュディス・メリルの『いりりの影』のような、初期の米原爆文学に内包される反共産主義的冷戦政治への批判を繰り返した。

テリー・テンベスト・ウィリアムスと同様、テリ・ヘインは、アメリカ西部における「低居住人口区域」に対する政府の扱いに疑問を抱いた「コールド・ウォー・キッド (冷戦時代の子供)」である。ヘインが『アトミック・ファームガール』に描いた風景とコミュニケーションは、ワシントン州南東部にあり、ハンフォード・サイトからの放射能汚染の影響にさらされている。長崎の原爆に使

用されたプルトニウムの精製が行われたことで知られるハンフォードでは、一九八七年に作業が停止され、二年後、連邦政府のエネルギー省、アメリカ合衆国環境保護局、そしてワシントン州エコロジ省が、固定廃棄物や液体廃棄物の浄化作業を開始した (Hanford go!)。⁽¹⁷⁾ 大規模な除染作業が行われたにもかかわらず、ヘインが指摘しているように、「ハンフォードの老朽化した貯蔵タンクから放射性廃棄物が漏れたという報告は、今でも後を絶たない。ひどいもので百万ガロンもの高レベル放射性廃棄物を含んだタンクは一七七あり、これは地球上におけるもつとも危険な廃棄物が合計で約五千四百万ガロンあることを意味する」(二四六頁)。⁽¹⁸⁾ ヘインの語りの主な関心は、コロンビア川、そしてハンフォードの川下にあるコミュニケーションや小麦畑に、核汚染がもたらす影響であった。

六. エピローグ——ポスト9・11における核文学

ソビエト連邦は過去のものかもしれないが、核文化はいまだ、過去のものとなっていない。一九八〇年代後半、東西ブロックの関係が緩和したにもかかわらず、ニューヨークリアリズムはいまだアメリカ人の想像力をとらえている。そして、本論で扱った四つのテーマにしてみても、様々な媒体を横断しつつ、探求され続けている。冷戦から生まれた芸術、文学、映画は、エコクリティシズムやトラウマ研究といった様々な観点から、再検討され続けている。そして再検討される度に、古いテクストに新しい見識が生まれる。我々のエレクトロニクス時代における世界を揺るがす事件

は、とてつもなく巨大で直接的な影響を核問題に与えてきた。とりわけ福島原発事故後に関連した問題としては、当然のことながら、核エネルギー（そして核廃棄物）が市民に及ぼす脅威が含まれるだろう。そしてまた、テロリストが核廃棄物を「汚い爆弾」に使用する脅威も加えておこう。こういった考えは過去数年において、アメリカの政治、アクティヴィズム、アカデミアに多大な影響を与えてきた。さらに付け加えていえば、新たな文化的産物（「バイオハザード」といったビデオ・ゲームなど）もまた、生み出され続けている。しかし、このような文化的産物でさえも、冷戦心理や核の不安によつて作られていた。

注

- 1 Hersey, John. "A Reporter at Large: Hiroshima." *The New Yorker* 31 Aug. 1946: 15-68.
- 2 Michaud, Jon. "Eighty-Five from the Archive: John Hersey." *The New Yorker*. 8 June 2010. Web. <newyorker.com>
- 3 マラン・M・ウインクラー『アメリカ人の核意識——ヒロシマからマン・ニマンまで』（ミネルヴァ書房、一九九九年）。Winkler, Allan M. *Life Under a Cloud: American Anxiety about the Atom*. Urbana: U of Illinois P, 1993.
- 4 シモン・ハーシー『ヒロシマ』（初版一九四九年、法政大学出版局、二〇〇三年）。Hersey, John. *Hiroshima*. 1946. New York: Bantam, 1968.
- 5 *White Light/Black Rain: The Destruction of Hiroshima and Nagasaki*. Dir. Steven Okazaki. HBO films, 2007.
- 6 Merril, Judith. *Shadow on the Hearth*. New York: Doubleday, 1950.

Web. Available: authorsbookshelf.com<

<http://arturusbookshelf.com/sci-fi/merril/Shadow%20on%20the%20Hearth%20-%20Judith%20Merril.pdf>

- 7 Brians, Paul. *Nuclear Holocausts: Atomic War in Fiction, 1895-1984*. Kent: Kent State UP, 1987.
- 8 コーマック・マッカーシー『ザ・ロード』（黒原敏行訳、早川書房、二〇一〇年）。McCarthy, Cormac. *The Road*. 2006. New York: Vintage, 2006.
- 9 Monbiot, George. "Civilisation ends with a shutdown of human concern. Are we there already?" *The Guardian* (UK). 30 Oct. 2007: 29.
- 10 Cordle, Daniel. *States of Suspense: The Nuclear Age, Postmodernism and United States Fiction and Prose*. Manchester: Manchester UP, 2008.
- 11 「ダック・アンド・カバ」は「学校などで行われた訓練で子供たちは核攻撃から身を守るために、机の下に身を隠すよう訓練を受けていた」。
- 12 テイム・オブライエン『ニュークリア・エイジ』（初版一九九四年、村上春樹訳、文春文庫、二〇一一年）。O'Brien, Tim. *The Nuclear Age*. New York: Knopf, 1985.
- 13 カート・ヴォネガット『猫のゆりかご』（初版一九七九年、伊藤典夫訳、早川書房、二〇一二年）。Vonnegut, Kurt. *Cats Cradle*. New York: Dell, 1963.
- 14 レイチェル・カーソン『沈黙の春』（初版一九七四年、青木築一訳、新潮文庫、一九九八年）。Carson, Rachel. *Silent Spring*. 1962. Anniversary Edition. New York: Houghton Mifflin, 2002.
- 15 直訳するに「風下の人」。通常、核実験や原子力事故などによつて

被曝した人々を指す。

16 テリー・テンペスト・ウィリアムス『鳥と砂漠と湖と』(石井倫子
訳、宝島社、一九九五年) Williams, Terry *Tempest Refuge: An Unnatural*

History of Family and Place. 1991. New York: Vintage, 1992.

17 Hanford. Department of Energy. Web. <<http://www.hanford.gov/>>

18 Hein, Teri. *Atomic Farmgirl: Growing Up in the Wrong Place*. 2000.
New York: Mariner Books, 2003.